



京都大学医学部附属病院 放射線部

Division of Clinical Radiology Service, Kyoto University hospital

【施設概要と基本理念】

京大病院は京都市左京区の鴨川と五山の送り火で知られる大文字（如意ヶ嶽）のある東山に挟まれた地域に位置しています。本院は「患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する」「新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する」「専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する」という基本理念のもと、安全安心な医療の提供に取り組んでいます。近年は救急医療に力を入れており、救急車の応需数が年々増加しています。さらにこども医療センターが開設され、専門分野の垣根をこえて他施設では実施困難な高度な医療に幅広く取り組み、高度小児医療の新たな拠点として快適な療育環境の提供を目指しています。また臨床研究中核病院に指定されている本院においては新しい医療を研究・開発することが責務です。京都大学 iPS 研究所との研究も進めており、次世代医療・iPS 細胞研究センター（Ki-CONNECT）が治験病棟として稼働しています。



【放射線部技師室の年間方針】

「時代の流れを常を感じ取り、国立大学の診療放射線技師としての自覚を持って行動する」を基本に技師室の年間方針（目標）を毎年掲げています。2023 年は基盤強化、診療、育成、研究および地域貢献の 5 つからなり、毎年個人および組織への貢献について個人が目標を設定します。目標内容には専門技師の取得、研究発表を行う、マニュアルの充実を図るなど様々で、各自が積極的に活動しています。進捗については年 2 回の面談を通して確認しています。個人と組織の目標を可能な限りマッチングできれば win-win な関係になります。できるだけベクトルを合わせて必要に応じて意見交換をしながらすすめるようにしています。

【放射線部の診療体制】

診療放射線技師は68名（5年有期雇用含む）で男女比は概ね2:1となっています。

放射線診断科・放射線治療医師や医学物理士、看護師、臨床工学技士および事務職員など数多くのスタッフが一丸となり京大病院の診療を支えています。技師の診療体制は3つのグループに分かれており、画像診断・IVRグループは一般撮影、血管造影（手術部設置のハイブリッド アンギオシステム含む）、X線CTおよび透視検査を担当します。分子イメージンググループはMR検査（手術部設置のハイブリッドMRシステム含む）、RI検査（PET-MR含む）、骨密度、手術部撮影およびポータブル撮影を担当します。放射線治療グループは放射線治療、密封小線源治療となっています。



近年は救急患者の応需が増加傾向です。さらに救急検査も高度化しており、2名の診療放射線技師で夜間・休日の交替勤務を担当していますが、検査が重複し2人とも走り回る状態になることも珍しくありません。

放射線部の検査・治療室は中央診療施設棟、外来診療棟および中病棟と3つの建物で広範囲にわたります。京都という土地柄か高層の建物は少なく院内も横移動が多いです。また大学本部の保健診療所でも業務をしています。



～京大病院放射線部の特徴～

【人財育成】

入職後の基本的な勤務体制は、最初の2～3年で6つの各部門を数か月単位でローテーションし、基本スキルを身につけます。各新人には専任の臨床コーチが診療業務はもちろん、装置点検や線量測定などもOJT（On the Job Training）で育成していきます。臨床コーチと新人が人財育成を通してお互いに成長できるよう努めています。ローテーションする順番により異なりますが交替勤務のスキルが充足した技師から夜間・休日の勤務を担当します。

これからは新人のみならず、中堅技師についても求められるスキルの視覚化と再考が必要と考えており、主任以上を対象にした研修会を開催し、現在検討しています。また他施設との人事交流も行っており多くの技師が他施設での勤務を通して経験を積んでいます。

また複数の大学・がんセンターから京大病院に研修に来られました。さらには京大病院から中央省庁への出向も行っています。このように院内はもとより他医療施設、さらには中央省庁との繋がりを通し「外を知ること」で「中が見える・理解できる」ことはとても重要であると考えています。

【放射線部の管理業務体制】

診療業務以外にも、医療安全、感染予防、学術、法規、情報管理、情報発信、治験、総務など放射線部を運営するにあたり多くのことがあります。これらを副技師長、主任を中心に管理・運営しています。また部内技師全員がどこかの管理業務を担務することで全員参加型の管理業務体制にしています。

【3D ラボに代表される他診療科連携】

3D ラボとして「ここがすごいぞ」と声を大にして言えることはありませんが、「大きい組織でもやる」というこだわりもっています。我々が作成した 3D 画像がどのように役立っているのか、何が足りないのかを振り返る機会を設けています。CT 室で一緒に作成することもあります。これまで整形外科、呼吸器外科、消化管外科、心臓血管外科、小児科、循環器内科、脳神経外科と多くの診療科と話し合いをしました。ルーチン処理の見直しや、医師と一緒に手術に役立つ画像について議論し、連携強化しました。他施設含め電子カルテ上で自由に 3D 画像が作成できる仕組みが普及しており、当院でも導入されています。しかしながら、わざわざ CT 室に来てくれる先生も居られ、何気ない雑談が勉強になっています。CT 室にわざわざ来るのは不便ですが、我々技師にとっては益になっており、この不便益こそが「スキルとモチベーションを高め合う場」になっていると考えています。「最短」「最適」が求められる時代ですが、敢えて抗おうかと思っています。コミュニケーションが取れていると、診療科から相談されることも多いですし、私たちも仕事や相談がしやすくなります。「医師との距離が近い」これは小さな病院でよく言われることですが、その距離感を京大病院でも行っています。今後はどのように継続していくかが課題だと思っています。

また CFT(Cross-Functional Team)と称して、乳腺領域におけるモダリティ横断的な技師を目指し、勉強会の開催や、放射線診断科・乳腺外科のカンファレンスに定期的に参加し知識の幅と深堀を進めています。今後は他の領域についても検討していきます。

【学術活動】

京大病院放射線部は技師室の年間目標として、「論文採択・院内外を含めた共同研究の促進」を掲げています。そこで、学術グループが組織され、技師の学術活動をバックアップしています。主な活動は、学会抄録の校正や予演会の企画、外部勉強会の告知・共有です。また、入職 5 年目までの技師を対象にスライド作成やプレゼンの機会を持ってもらうため、「日常臨床で気になったこと」をテーマにした報告会を開催しています。さらに、学術グループが主導となり研究進捗報告会を企画し、希望者には継続的な支援を行うことによって学会発表や論文採択を目指します。

過去 3 年間の学外発表数と論文数について、令和 2,3 年度は COVID-19 の影響を受け、発表数・論文数ともに減少傾向でした。しかし、令和 4 年度には COVID-19 流行前と同等の発表数・論文数を達成できました。また、注目すべき点は近年、他診療科論文に共著者として掲載される技師が増加傾向にあることです。さらに過去 10 年間で修士 6 名、博士 4 名の進学実績があり、業務と学業を両立しながら個人のステップアップを行う技師も多くいます。未だ COVID-19 の影響により学会参加・発表が制限される状況下ですが、技師室年間目標達成を目指して、継続的な学術活動を行っています。

【生活環境】

すぐ近くに鴨川が流れており春は桜、秋は紅葉と美しい景色を堪能できます。教科書に載っているような寺社仏閣や史跡が数多くあるので歴史好きにはたまらない。国内外問わず通年を通して観光客が多く訪れる。夏はとても蒸し暑く、ほとんど雪が降らないのに冬はとても寒い。市街地は起伏が少なく自転車があれば十分生活できるコンパクトな街。

人体に放射線を照射できる医師以外の唯一の職種として、検査・治療を通じて患者さんに寄り添い、我々にしかできない仕事を通して、プロフェッショナルとしての誇りを持った診療放射線技師を目指します。また広い視野で常に学び続ける姿勢を大事にします。京大病院との関わりを通して共に成長してみませんか。

さらに詳しい情報は京大病院放射線部 HP (<https://crs.kuhp.kyoto-u.ac.jp/>)を参照して下さい。